

グラフで見る 十勝農業の歴史 (3)

－作物(1) 水稻・陸稻・麦類(小麦, 大麦, 裸麦)・雑穀類(粟, 稗, 黍)－

Historical outline about crops in Tokachi (3)

－ The rice, dry rice, wheat, barley, naked barley, foxtail millet, pearl millet and millet －

帯広百年記念館 編

はじめに

本稿は、十勝農業の歴史を農畜産物生産量のグラフから概観してみようと企画したものである。グラフのデータは、平成8年度から平成12年度まで帯広百年記念館の郷土史調査員であった井上寿が執筆し、平成13年度以降、その原稿の整理を進めてきた『十勝農業史』に所収されている統計値をもとにしている。

また、グラフに表現されている生産量の推移についての理解を助けるために、『十勝農業史』より関連する事項を抜き出し、要約したものを併記した。今回は作物のうち、水稻・陸稻・麦類(小麦, 大麦, 裸麦)・雑穀類(粟, 稗, 黍)を取り上げた。

グラフの見方

『十勝農業史』に所収されている農業生産量の統計値(明治29年(1896)～平成10年(1998))は、井上氏が様々な資料を参照し、まとめたものである。本稿では、井上氏が参照した統計資料をもとにデータを整理し、グラフ化した。

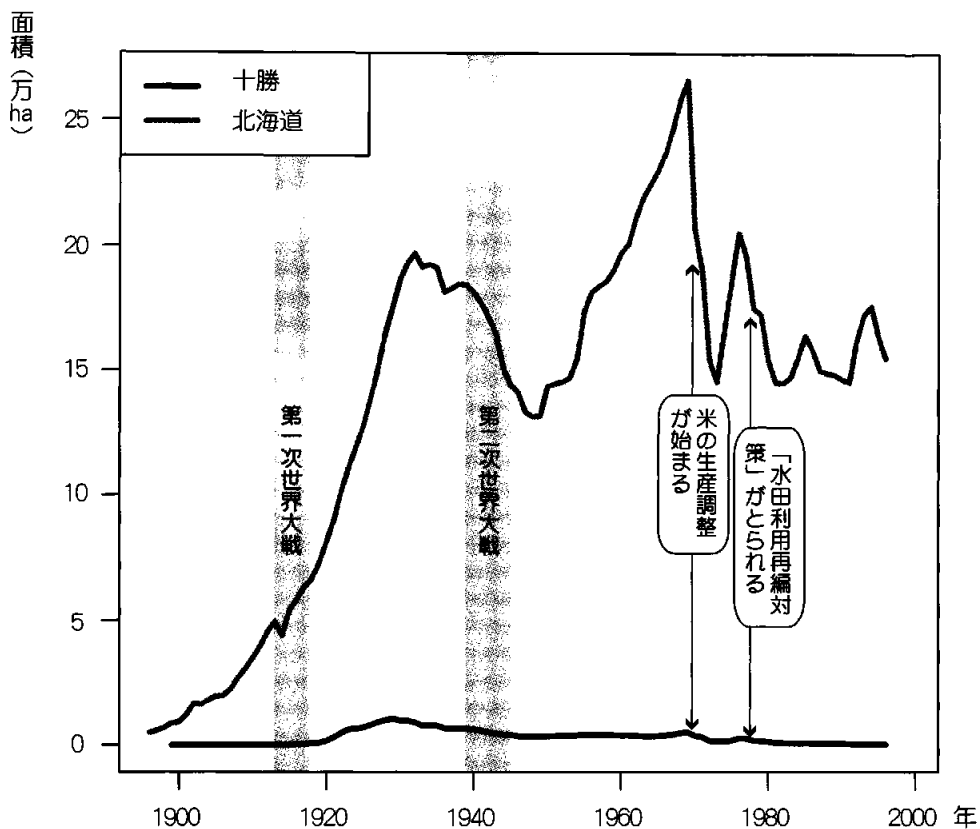
グラフは、北海道と十勝管内における作物の作付面積と収量を折れ線で表したものである。線が途切れている箇所は、データがない年である。また、作付面積の推移に関して理解を深めていただくために、主な出来事をグラフ中に併記した。

統計資料は、帯広統計・情報センター(旧:帯広統計情報事務所)にあるものを参考とした。ただし期間によって異なる資料を使用しているため、単位や調査基準が異なる。本稿の最後に掲載している統計表に、出典(下記参照)を明記しているため、細部に関しては留意する必要がある。作物の種類によっては統計資料が見つからず、グラフ化されていないものもあるが、ご了承いただきたい。

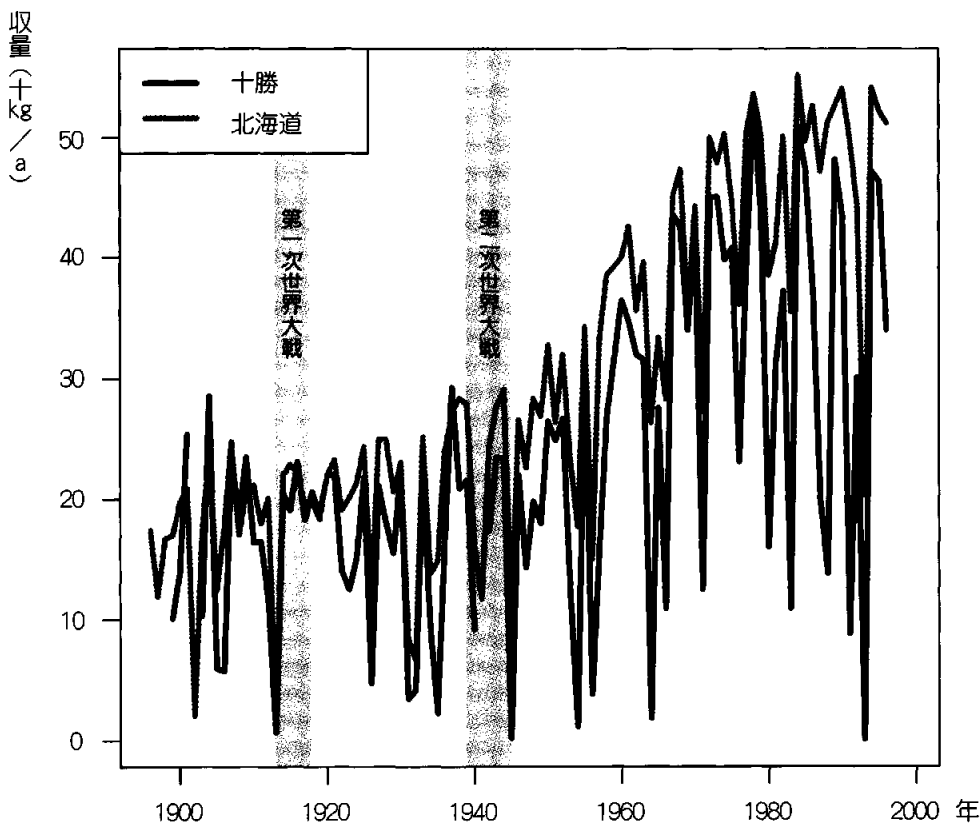
《出典》 b:北海道農林水産統計50年の歩み 農林水産省 北海道統計情報事務所 平成9年12月
g:累年統計表 日高・十勝・釧路の作物統計 農林省帯広統計調査事務所編 1970年
h:日高・十勝・釧路 農作物累年統計 農林省帯広統計事務所 昭和51年3月
I:累年統計－作物編－(日高・十勝・釧路) 農林水産省帯広統計事務所 平成7年3月

《凡例》 b:「-」事実のないもの
g:「-」該当数値のないもの
h:「-」該当数値のないもの

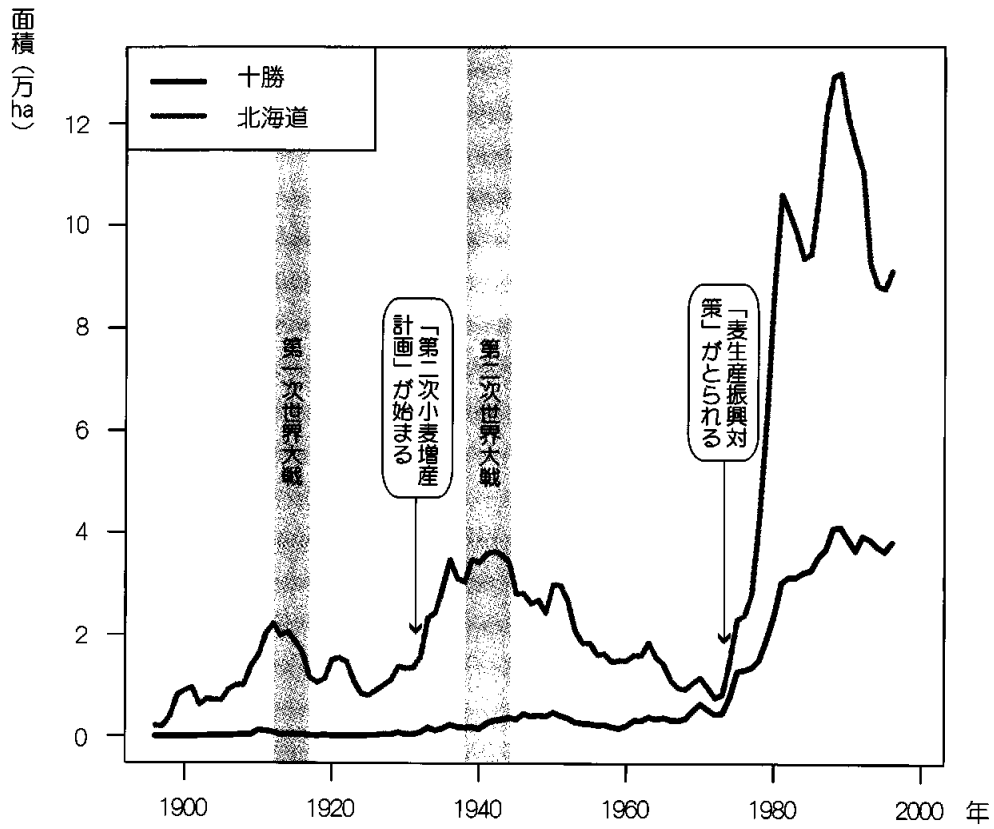
グラフで見る十勝農業の歴史 (3)



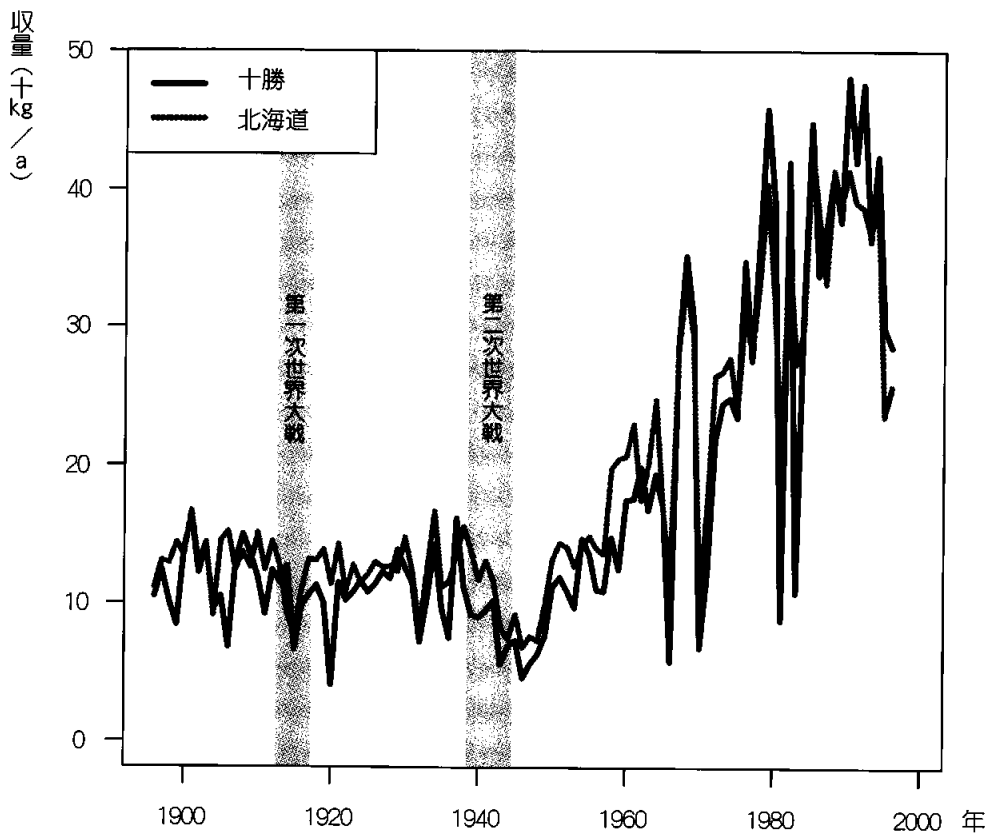
グラフ1：水稲の作付面積と主なできごと



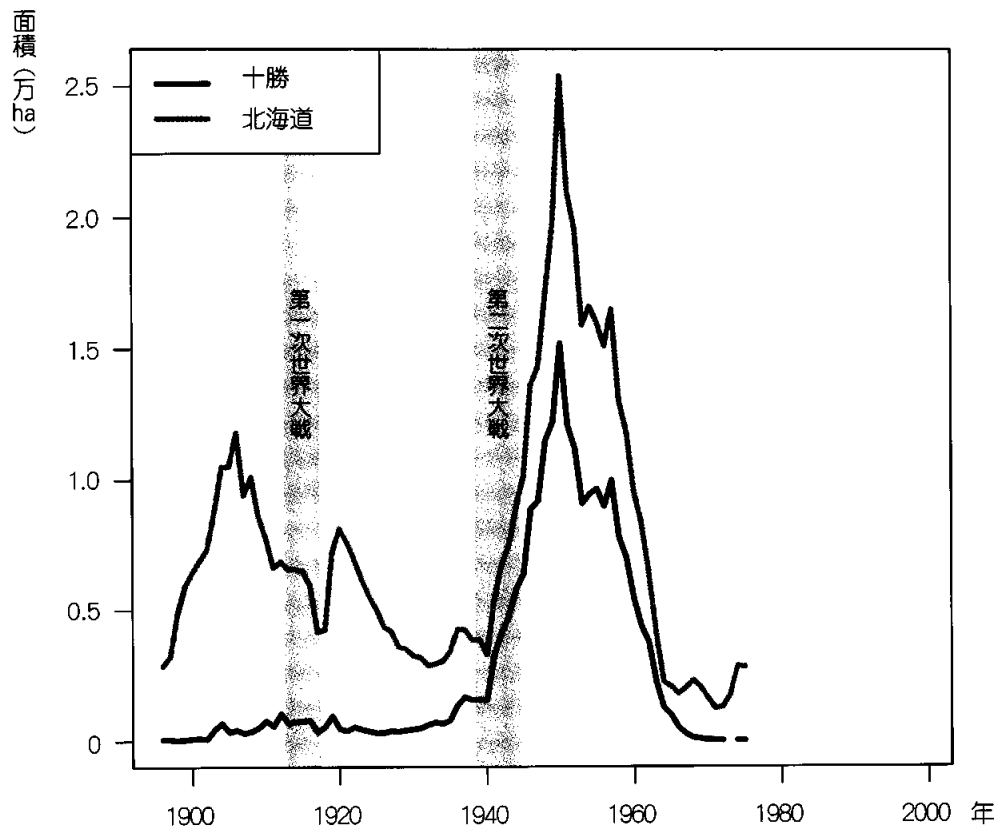
グラフ2：水稲の収量



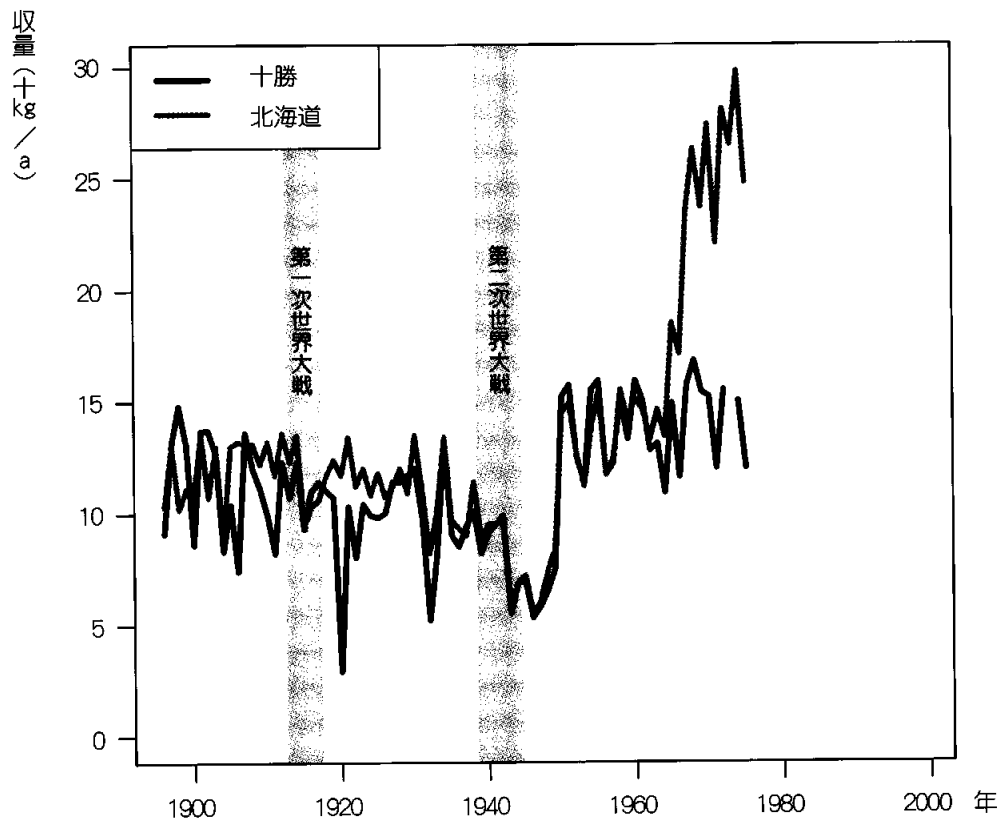
グラフ3：小麦の作付面積と主なできごと



グラフ4：小麦の収量



グラフ5：大麦の作付面積



グラフ6：大麦の収量

十勝農業の概要－作物（1）稲類〈水稻〉－

井上 寿 著「十勝農業史」

第3編 十勝農業変遷史, 第1章 作物栽培の経過, 第2節 稲類 より

〈北海道〉幕府による東蝦夷地の直轄が始められた翌年の寛政12年（1800）、箱館付近で官吏によって初めて試作された稲は登熟しないなどの凶作が数年続き、水田は荒廃した。そのような状況の中で開拓使は水稻の作付けには消極的だったが、明治の中頃から人口増加や米の価格高騰などの社会状況によりしだいに作付けに積極的になった。技術面でも、道南地方のみであった作付けが石狩地方で可能になったことから、作付けは増加することになる。明治25年（1892）末以降は北海道庁が積極的に農業政策の体系化を進め、造田が推進された。例えば、明治30年（1897）に発布された「北海道国有未開地処分法」では開墾等をした土地を全地成功ののち無償付与としている。また、明治35年（1902）に施行された「北海道土功組合法」により農業上必要な道路・用排水路の維持などが進んだことから、各地で多くの畑地が水田に転換された。造田には、この頃行われた勸業銀行と北海道拓殖銀行による融資も大きな影響を与えている。

大正2年（1913）の大凶作や大正3年（1914）の第一次世界大戦勃発により、一時的な作付けの縮小はあったものの、大正末期から昭和初期にかけて道北・道東地域にも作付けが広がっていった。昭和6（1931）、7（1932）、9（1934）、10（1935）、15（1940）、16（1941）、20（1945）年の冷害や第二次世界大戦の勃発などで再び作付けは減少に転じたが、戦後は農業技術の向上による単位面積当たりの収量増加と、全国的な増反により増加した。昭和34年（1959）には戦前のピークまで達したものの、食生活の変化で米の消費が低下し、昭和45年（1970）に始まった米の生産調整を境に作付けは再び減少することとなる。

その後は、昭和51年（1976）と昭和55年（1980）の冷害の合間の昭和53年（1978）に「水田利用再編対策」が閣議了承され、水稻だけでなく必要に応じて飼料作物や野菜など畑作物の作付けをするなど、水田は汎用耕地としての機能を高める方向へと転換していくこととなった。

平成9年（1997）以降は良食味品種である「はしのゆめ」「空育150号」の本格的な栽培が始まるなど、北海道米全体の食味レベルの底上げが行われている。

〈十勝〉明治16年（1883）帯広に入植した晩成社は、同年と明治19年（1886）、明治20年（1887）に水稻を試作したが失敗に終わった。その後、明治26年（1893）に音更村下土幌の増田立吉が土幌川右岸で成功させたことが栽培を広めるきっかけとなり、十勝農事試作場も明治29年（1896）に水稻試験を開始している。明治32年（1899）には幕別村西猿別の西川茂平、千代田（池田）の武智梅太郎が試作を成功させ、これ以降、帯広・芽室・池田・幕別・清水などに作付けが拡大した。明治40年（1907）から大正初期にかけては「十勝黒毛」という品種の普及や、第一次世界大戦後の好景気における造田気運の高まりにより作付けは増加し、相次いだ土功組合の設立により灌漑・排水施設が整備されたこともいっそう拍車をかけた。

昭和11年（1936）頃から冷害対策として直播栽培に代わり保護陸苗代栽培が普及したが、昭和6（1931）、7（1932）、9（1934）、10（1935）、15（1940）、16（1941）、20（1945）年の冷害と第二次世界大戦による労働力や資材の不足で作付けは減少に転じた。昭和38年（1963）頃になると機械移植による効率化が進み、昭和41（1966）年から昭和44年（1969）に再び作付けは増加したものの、昭和45年（1970）の米の生産調整以降著しく減少した。

現在は音更・池田・幕別で約20ヘクタールの作付けが行われている。

十勝農業の概要－作物（1）稲類〈陸稲〉－

井上 寿 著「十勝農業史」

第3編 十勝農業変遷史，第1章 作物栽培の経過，第2節 稲類 より

明治16（1883）と17年（1884）に帯広で晩成社が陸稲を試作したが、トノサマバツタによる被害や霜害で収穫が得られなかった。また明治27年（1894）忠類村でも試作されているが、再び霜害で枯れており、当時は冷害の危険性が高い作物であったように思われる。

十勝農業試験場では明治30年（1897）から品種試験が始められ、第一次世界大戦の影響もあってか明治42年（1909）に一度中断したものの、大正9年（1920）に再開され、しだいに耐寒性のある品種が選抜されていった。大正5年（1916）には幕別村猿別で藤岡清兵衛が、大正7年（1918）には幕別村字咭別村の松下百蔵が栽培を成功させている。陸稲は高丘地・低地・地力が低い土地でも栽培が可能で、栄養価値も高かったために、それ以降、自給用作物として作付けが増えていった。

しかし大正11年（1922）を境に作付けは減少し、昭和に入ると作付面積は1ヘクタール以下となった。昭和13年（1938）に北海道初の陸稲の優良品種として「北海早生・北海赤毛」が発表され収量が安定したため再び作付けは増加し、十勝の陸稲作付面積は全道の47%を占めるまでになったが、価格が低い、収量が安定しない、さらには食糧事情の好転により急激に作付けは減少し、昭和36年（1961）には姿を消した。

十勝農業の概要－作物（1）麦類〈小麦，大麦，裸麦〉－

井上 寿 著「十勝農業史」

第3編 十勝農業変遷史，第1章 作物栽培の経過，第3節 麦類 より

〈小麦〉開拓当初から自給用作物としてだけでなく商品作物としての価値をもっていた小麦の作付けは、開拓の進展とともに順調に広がり、明治37年（1904）に日露戦争が始まるとさらなる需要の拡大で作付けは増えた。しかし、第一次世界大戦中に菜豆・豌豆・馬鈴薯・亜麻などの輸出用農産物の価格が上昇しそれらの作付けが増加したことや、その後の銹病（*1）の発生、石狩・空知地方での水稲の作付けの増加などにより、小麦の作付けは大正末期まで減少し続けた。それに加え、この頃は秋播小麦の栽培技術が確立しておらず、冬に土壤が凍結する十勝や網走などの地方では冬枯れの危険が高かったことも一因であろう。

昭和7年（1932）に「小麦増産5カ年計画」が立てられたことにより作付けは増加し、品種改良も進み単位面積当たりの収量が増えた。しかし一方で、甜菜や馬鈴薯などに比べると依然として収量は低く、作付けは再び減少していった。昭和48年（1973）以降、作付けが増加に転じたのは、小麦を含む輸入農産物の価格暴騰にともない、作付け増加を目指した生産奨励金の支給が行われたためである。

平成2年（1990）以降は野菜への移行が進み、小麦の作付けは減少に転じている。

〈大麦〉大麦は明治の初めから主として自給用作物として栽培されていたが、脱穀が難しいこともあって明治末期以降は他の自給用作物である裸麦に代わっていった。第一次世界大戦後はビールの原料として作付けを伸ばした。主産地は石狩・後志・胆振などであったが、水稲の作付けに押されてしだ

いに網走地方に移り、副次作として栽培された。

第二次世界大戦中は食糧難を回避するための増産政策がとられ、大麦の作付けは特に十勝地方では増加した。戦後は、食糧事情の回復にともない昭和25年（1950）頃を最高にして著しく減少する。

〈裸麦〉静内から始まった裸麦の栽培は、しだいに日高全体や道央圏に広まっていった。静内では収穫量や調理の容易さ、食味などの点で、裸麦は大麦や小麦より優れているとされていたようである。こうした理由から作付けは大正中期までは順調に増加したが、地力の低下にともない大正末期以降は減少に転じた。

栽培地域は、明治末期から大正中期には空知・上川地方が主産地であり、その後は一時期網走地方に移ったものの、再び上川地方が主産地となっている。

十勝地方の麦類の作付け傾向は北海道と同様で、詳しくは「十勝農業試験場80年のあゆみ」（昭和51年8月10日発行）を参照されたい。

- * 1 ^{さびひょう} 銹病の発生が北海道で初めて発生が知られたのは大正2年（1913）である。肥沃地または無風地帯などで軟弱に生育した場合に罹病しやすく、時々圃場全体が夏胞子のため黄褐色になり、大きな被害を受けることがある。しかし、銹病に対し抵抗力のあるウイーラ、ヒブラ、レイナなどオランダ品種の登場で被害はほとんどなくなった。

十勝農業の概要－作物（1）雑穀類〈粟、稗、黍〉－

井上 寿 著「十勝農業史」

第3編 十勝農業変遷史、第1章 作物栽培の経過、第5節 雑穀類 より

〈粟〉アイヌ民族によって古くから食糧作物として栽培されており、開拓の進展とともに作付けはさらに増加した。十勝では明治29年（1896）に十勝農事試験場で試験が始められ、明治39年（1906）ころに全道で約1万ヘクタールにも達した。しかし第一次世界大戦中に作付けは減少し、その後はわずかしかみられなかった。

〈稗〉粟と同様にアイヌ民族の食糧作物として栽培されていた。痩せた土地でも栽培でき、早害や冷害・湿害・病害を受けることが少なかったため、十勝の場合、明治32年（1899）までは食糧として栽培され1956ヘクタールの作付けがあった。しかしその後、作付面積はしだいに減少し十勝では20ヘクタールまで落ち込んだ。昭和12年（1937）以降は採卵養鶏の飼料として再び作付面積が増え、昭和20年（1945）には北海道では9300ヘクタール、十勝では約4000ヘクタールに達した。しかし、養鶏が完全配合飼料に依存すようになるとともに、作付けは減り、昭和40年代に姿を消した。

〈黍〉開拓入植者の重要な食糧として明治20年頃から栽培が始まり、十勝では明治29年（1896）に十勝農事試験場で試験が始められている。明治30年代に入り自給食料用として作付面積が増加し、北海道の作付面積は大正3年（1914）に2万2000ヘクタールと最も多かった。しかし粟と同様に第一次世界大戦中に価格の高い商品作物に押され、しだいに減少し、昭和29年（1954）には北海道で800ヘクタールとなった。十勝地方では第一次世界大戦後広く普及したため作付けは増加し、大正末期に水田の拡大とともに減り、姿を消していった。

表3：大麦の作付面積と収量

年	年次	北海道の作付面積(ha)	十勝の作付面積(ha)	北海道の収量(kg/a)	十勝の収量(kg/a)	出典
1896	明治29年	2830	58	103	91	g
1897	明治30年	3230	54	130	131	g
1898	明治31年	4860	35	102	148	g
1899	明治32年	5900	43	111	131	g
1900	明治33年	6420	84	108	86	g
1901	明治34年	6880	99	135	137	g
1902	明治35年	7310	71	107	137	g
1903	明治36年	8730	437	130	127	g
1904	明治37年	10500	673	87	83	g
1905	明治38年	10500	339	130	104	g
1906	明治39年	11800	416	132	74	g
1907	明治40年	9410	296	131	136	g
1908	明治41年	10100	360	131	120	g
1909	明治42年	8610	503	122	111	g
1910	明治43年	7750	771	132	99	g
1911	明治44年	6630	562	117	82	g
1912	大正1年	6880	1040	136	123	g
1913	大正2年	6550	671	123	107	g
1914	大正3年	6570	744	135	123	g
1915	大正4年	6490	757	94	93	g
1916	大正5年	5950	772	103	110	g
1917	大正6年	4150	331	106	114	g
1918	大正7年	4230	539	117	110	g
1919	大正8年	7200	952	124	107	g
1920	大正9年	8130	456	117	29	g
1921	大正10年	7690	382	134	103	g
1922	大正11年	6920	521	112	80	g
1923	大正12年	6180	433	120	104	g
1924	大正13年	5540	369	108	99	g
1925	大正14年	5020	303	118	98	g
1926	昭和1年	4340	308	107	100	g
1927	昭和2年	4170	383	112	114	g
1928	昭和3年	3580	359	120	114	g
1929	昭和4年	3500	411	109	117	g
1930	昭和5年	3250	440	135	120	g
1931	昭和6年	3180	490	110	98	g
1932	昭和7年	2880	621	82	52	g
1933	昭和8年	2950	705	102	82	g
1934	昭和9年	3060	662	134	132	g
1935	昭和10年	3410	791	97	90	g
1936	昭和11年	4240	1360	93	85	g

年	年次	北海道の作付面積(ha)	十勝の作付面積(ha)	北海道の収量(kg/a)	十勝の収量(kg/a)	出典
1937	昭和12年	4250	1680	90	94	g
1938	昭和13年	3850	1580	114	101	g
1939	昭和14年	3870	1590	89	82	g
1940	昭和15年	3300	1570	95	91	g
1941	昭和16年	3360	3250	95	95	g
1942	昭和17年	6710	1120	99	97	g
1943	昭和18年	7460	4710	58	55	g
1944	昭和19年	8930	5800	69	69	g
1945	昭和20年	10100	6360	72	69	g
1946	昭和21年	13600	8880	55	53	g
1947	昭和22年	14300	9180	60	58	g
1948	昭和23年	17000	11500	74	65	g
1949	昭和24年	19700	12200	84	75	g
1950	昭和25年	25400	15200	145	152	g
1951	昭和26年	21000	12100	149	157	g
1952	昭和27年	19600	11200	126	125	g
1953	昭和28年	15900	9090	112	113	g
1954	昭和29年	16600	9460	138	155	g
1955	昭和30年	16000	9650	154	159	g
1956	昭和31年	15100	8980	117	117	g
1957	昭和32年	16500	9980	122	124	g
1958	昭和33年	13000	7800	155	151	g
1959	昭和34年	11800	6980	141	133	g
1960	昭和35年	9540	5420	151	159	g
1961	昭和36年	8340	4360	146	150	g
1962	昭和37年	6410	3750	133	128	g
1963	昭和38年	4060	2250	146	131	g
1964	昭和39年	2250	1260	134	109	g
1965	昭和40年	2080	976	185	149	g
1966	昭和41年	1800	495	171	116	g
1967	昭和42年	2030	253	235	157	g
1968	昭和43年	2310	109	263	168	g
1969	昭和44年	2050	63	237	154	g
1970	昭和45年	1630	21	274	152	h
1971	昭和46年	1230	10	221	120	h
1972	昭和47年	1310	2	281	155	h
1973	昭和48年	1760	-	265	-	h
1974	昭和49年	2860	0	298	150	h
1975	昭和50年	2830	2	248	120	h

1976(昭和51)年～1998(平成10)年の間は資料なし

おわりに

整理にあたっては、本館学芸調査員 千葉章仁(平成13年度～平成17年度)、平林結実(平成18年度～平成20年度)、および学芸員 山原敏朗が担当した。

なお、農林水産省北海道農政事務所帯広統計・情報センター統括情報官 木村浩之氏には統計データに関するご教示とご協力を得ました。最後になりましたが、感謝の意を表します。

註)『十勝農業史』は本館で保管しております。閲覧をご希望される方はご連絡ください。